

# 石崎光瑤

■2025年

4月23日(水)→5月6日(火・休)

■日本橋高島屋S.C. 本館8階ホール

主催:毎日新聞社 企画協力:南砺市立福光美術館

※作品はいずれも南砺市立福光美術館蔵。

※作品保護のため、温度、湿度、照明を調整しております。

## 出品目録

※会場構成の都合上、展示の順番は作品番号と必ずしも一致しません。都合により、展示作品が変更になる場合がございます。

※本展は巡回展『生誕140年記念 石崎光瑤』の内容を再構成して開催します。記載のない番号は展示がございません。あらかじめご了承ください。

作品番号	作品名	制作年	材質技法	形状・員数	初出展
第1章 画学修業と登山					
8	高嶺百花譜	1908年	絹本着色	二冊	
9	白山の霊華	1910年頃	絹本着色	一幅	
11	笈	1914年	絹本着色	二曲一双	第八回文展(褒状)
12	森の藤	1915年	絹本着色	六曲一隻	第九回文展
第2章 インドへの旅、新しい日本画へ					
16	インコ(ラブバード)	1917年頃	紙本着色	一面	
17	第一次印度旅行 六 カシミール洲 水郷	1917年	紙本着色	一卷	
18	第一次印度旅行 八 石楠花 シシヤナーク谿谷	1917年	紙本着色	一卷	
20	雪山夜色之図	1918年	絹本墨画	一幅	
22	燦雨	1919年	絹本着色	六曲一双	第一回帝展(特選)
23	インコ	1919年頃	紙本着色	一面	
25	緑蔭	1920年	絹本着色	一幅	
27	雪	1920年	画布着色	二曲一双	第二回帝展
第3章 深まる絵画表現					
33	麗日風鳥	1924年	絹本着色	二幅	
38	寂光	1929年	絹本着色	二曲一隻	第十回帝展
39	藤花孔雀之図	1929年	絹本着色	一幅	羅馬日本美術展覧会
40	豊穰	1930年	絹本着色	一幅	羅馬日本美術展覧会
41	笹百合	1930年	絹本着色	二曲一隻	第十一回帝展
43	紅楓	1931年	絹本着色	六曲一隻	
44	惜春	1931年	紙本着色	二曲一隻	第十二回帝展
47	《雪山花信》下絵 綬鶏	1933年頃	紙本着色	一幅	
50	ヤマドリ雄《春律》下絵	1928年頃	紙本着色	一面	
51	ヤマドリ雌《春律》下絵	1928年頃	紙本着色	一面	

## 第4章 静謐なる境地へ

56	奔湍	1936年	絹本着色	六曲一双	昭和十一年文展(招待展)
58	霜月	1942年	絹本着色	一幅	
60	遅日	1939年	絹本着色	一幅	春虹会第五回展
62	隆冬	1940年	絹本着色	六曲一隻	紀元二六〇〇年奉祝美術展
64	清夏	1943年頃	絹本着色	一幅	
65	後圃	1943年	絹本着色	一幅	
66	聚芳	1944年	絹本着色	一幅	平安遷都一一五〇年奉祝京都市美術展
67	遊兎	1946年	絹本着色	一幅	
70	アオバト	1943年頃	紙本着色	一面	
73	アワの穂	1946年	紙本着色	一面	
74	小下絵巻(大正時代)	1916~1922年頃	紙本着色	一巻	
75	小下絵巻(昭和時代)	1927~1942年頃	紙本着色	一巻	

資料1	雅号証	1897年	—	一枚	
資料3	石崎光瑠使用 登山用帽子(ピスヘルメット)	—	—	一点	
資料7	『印度窟院精華 附記行』	1919年	—	一冊	
資料8	石崎光瑠宛 土田麦僊葉書	1920年	—	一枚	
資料11	石崎光瑠自用印	—	—	二十二顆のうち	
資料13	石崎光瑠自用印 印箋(桑名鉄城作)	—	—	六枚	

## 石崎光瑠物語

「写野さんコメント」 漫画を描くために様々な文章や写真資料を見ましたが、登山山に携わられたと思われる写真の中で、好奇心を知られない少年のような表情をされているのが特に印象的でした。人に優しく熱心な性格だったという光瑠さん、そんなお人柄が少しでも伝われば幸いです。

歴代日本画家の紹介漫画でもおなじみ、  
日本画家・河野沙也子さんが、  
本展に石崎光瑠の紹介漫画を  
描き下ろしてくれました。

石崎光瑠  
いしざき こうろう  
1884/04/11  
-1947/03/25

本名 猪四一  
出身地 富山県砺波郡福光町(現南砺市)  
家系 豪商(父は実業家で文人)  
家族構成 五男  
師匠 山本光一、竹内楳風  
好きな食べ物 干し柿、うす揚げ



22歳の頃から本格的な登山を始めた光瑠。草花や山容を写生したり、写真を撮ったりしたという。

30歳の時、第8回文展で《菊》を出品し褒状を受賞。この作品に筆水清方も惹かれたといわれている。



32歳でインドへ向かい、帰国後の《熱国妍春》《燦雨》は、文展・帝展で連続特選となる。

昭和に入り、上品で重厚な大作《寂光》が生まれる。

光瑠は、夢の様な美しい世界を追い求めたのだった。

花鳥が織りなす、狗煙華やかな世界は、光瑠の代名詞にもなった。



栴風門で出会った土田麦僊とは苦学生として描き分けが合い、二人でお金を出し合って写生用の鳥を借りたこともあったようだ。

石崎君、もう返しに行かんと！

絵専へ入学したが、家庭の事情から光瑠は進学せず、山の世界へ入っていく。



1909年には民間パーティとしては初の剎岳登山に成功し、後にはヒマラヤにも登るなどしている。

ヨーロッパ滞在中にはいがみ合う友人たちの仲を取り持ったりと、人情に篤い姿も書き残されている。

黒田重太郎



光瑠といえは伊藤若冲とも関係が深い。ある時学生からこんな情報を受け：西福寺にある様子が、若冲のものかも、光瑠自身も研究は、若冲自身の作品世界を広げる手がかりにもなった。

後日模絵を見に行き、感銘を受けた光瑠は、模絵の複写作品を制作した。

若冲のものは、若冲のものでもないかも、光瑠自身も研究は、若冲自身の作品世界を広げる手がかりにもなった。



「生誕140年記念 石崎光瑠」展 関連マンガ

2024年

制作：河野沙也子 KAWANO Sayako

X(twitter): @aaoao5 ※無許可の転載、転用を禁じます。

Reproduction is prohibited.

参考文献：石崎光瑠「西福寺の若冲模繪」新発見の画蹟を觀て、『中央美術』12巻5号、1926年5月  
石崎光瑠「土田麦僊君の苦學時代」『塔影』12巻7号、1936年7月  
黒田重太郎「光瑠君と私」『美之園』13巻7号、1937年7月